

開催日 令和四年十一月十二日（土）  
対面・オンライン并用開催（山梨縣立大學）

日本道教學會  
第七十三回大會要項

日本道教學會

## 日本道教學會第七十三回大會案内

拜啟 仲秋の候 ますます御清祥のことと拜察申し上げます。

本學會第七十三回大會を來たる十一月十二日（土）に山梨縣立大學において（對面・オンライン并用）開催いたしますので、御参加くださいますよう御案内申し上げます。

ご参加の方は、學會ホームページよりお申込み下さい（三頁参照）。

敬具

令和四年十月十日

日本道教學會 會長

土屋 昌明

第七十三回大會準備委員長

名和 敏光

會員各位

## 日 程 表

日	時間	行事
11日 (金)	15:00~17:00	全国理事会（評議員も参加）
12日 (土)	9:50~10:00	開會式
	10:00~12:15	研究発表
	12:15~13:15	休憩
	13:15~14:55	研究発表
	14:55~15:00	休憩
	15:00~16:00	講演
	16:00~16:10	閉會式
	16:10~17:40	總會

■申し込みは學會ホームページよりお願いします。

■大會参加費

・参加費は無料です。

■晝食

辨當（1,000圓）をご注文頂くか、ご持参下さい。

大學周邊には飲食店・コンビニはありません。

## 大會參加方法について

本大會は対面及びZoomウェビナーによるオンライン方式併用で開催いたします。

期間内に豫め「日本道教學會ホームページ」(<https://www.taotic-research.jp/>)の「大會參加申し込みページ」から參加申し込みを行い、ZoomのID・パスワードを記したURLをお受け取りください。

御不明の點がございましたら、左記までお問い合わせください。

お問い合わせ：e-mail [doukyougakkai73@gmail.com](mailto:doukyougakkai73@gmail.com) (大會準備委員會事務局)

大會準備委員會電話：〇九〇ー一四七六ー一一二三 (山梨縣立大學名和研究室)

第七十三回大會日程次第（十一月十二日 土曜日）

午前の部（午前九時五十分～十二時十五分）

開會式

挨拶 山梨縣立大學學長 早川 正幸

大會準備委員長 名和 敏光

日本道教學會會長 土屋 昌明

研究發表

新出の曲直瀬流の養生書『攝生之常鑑』について

永塚 憲治（研醫會）

司會 三鬼 丈知（大阪公立大學）

日文研宗田文庫所藏『五輪碎并病形』の検討

池内早紀子（大阪府立大學大學院）

司會 浦山 きか（東北大學）

「馴虎」について——道教および佛教に關連して——

小山 瞳（關西大學大學院）

司會 山下 一夫（慶應義塾大學）

明代中期の關羽信仰——官僚呂柟の記録を中心に——

朝山 明彦（北海道大學大學院）

司會 二階堂善弘（關西大學）

休憩（十二時十五分～午後一時十五分）

午後の部（午後一時十五分～午後二時五十五分）

江南佛教總攝楊璉眞伽の道教攻撃とその波紋

孔 詩（東京大學大學院）

司會 乙坂 智子（橫濱市立大學）

近代マレーシアにおける青蓮教系教派の傳教について

司會 小武海櫻子（成蹊大學）

司會 松家 裕子（追手門學院大學）

宋代の鍊度と知識人

司會 松本 浩一（筑波大學名譽教授）

司會 山田 明廣（奈良學園大學）

休憩（午後二時五十五分～午後三時）

第七十三回日本道教學會記念講演

古代日本・朝鮮の出土資料―人面土器―から描く日本列島における道教

平川 南（國立歷史民俗博物館名譽教授・山梨縣立博物館名譽館長）

總會（午後四時十分～午後五時四十分）

新出の曲直瀨流の養生書『攝生之常鑑』について

永塚 憲治（研醫會）

近頃、公益財団法人研醫會の所藏となつた新出の曲直瀨流の養生書である『攝生之常鑑』について發表する。この『攝生之常鑑』は、全部で三七條の條文からなり、基本的に養生のことを記した漢文の引用の條文の後に、和語で譯を記している。先ず『攝生之常鑑』の書誌を記す。

日本五鍼眼原裝。澀引き表紙、書高二三×幅一六・四cm。外題は表紙に「攝生之常鑑」を墨書。全一冊、一誠堂のシールがある帙に收める。總目・目錄葉なし。卷首に「攝生之常鑑 正純編集焉」と題し、以下本文卷一九葉。書末に天正庚寅（一八・一五九〇年）の道三の跋半葉。料紙は日本楮紙で黄變する。無界、葉次なし。七行・行一八字内外の不定字。文祿二（一五九三）年の識語等、書き込み等なし。蟲損少々あり。

卷首にある正純とは初代道三の晩年の弟子で亨徳院家の初代である曲直瀨正純（一五五九～一六〇五）のことで正純が手を加えたが、書末の天正庚寅の曲直瀨道三（一五〇七～一五九四）の識語によれば、元々は道三が正純の求めに應じて養生の要點を一冊の書と成したもので、それを長宗我部家の久禮城城主の佐竹兵部少輔親辰に與えた

ものであると考えられる。

曲直瀬流の書物は、初代道三の著作を後の世代の者が加筆したのも多く、また後の者が權威付の爲か、後の時代の著作であるのに前の世代の作としたり、初代道三が師匠筋に當るとする月湖が撰する『全九集』等のように著作を僞作したり、單純に書誌事項に據れば、眞の作者や成立を見誤ることがある。そこで本發表は、全三七條の條文の典故を調査し、『攝生之常鑑』が道三の作であるかどうかを驗證する。

#### 【結果】

『攝生之常鑑』の引用の内、書名を明示するもので最も多いものでは、『三元』乃至『三元延壽』として引く元の李鵬飛の『三元參贊延壽書』（『道藏』では『三元延壽參贊書』の名で收録されている）が八條と最も多く、書名が明示されないが、『三元參贊延壽書』に見えるものが一七條あつた。これら合わせて二五條が『三元參贊延壽書』からの引用だと思われる。曲直瀬流と『三元參贊延壽書』の関係では、初代道三の手になる『可有錄』は、初めに『三元參贊延壽書』の李鵬飛の序をほぼ全文を引用し、本文では『三元參贊延壽書』と元の王珪の『泰定養生主論』から抜粹して初代道三が得意とした科疏形式で解釋を試みている。また延壽院家（今大路家）の初代で二代目道三こと曲直瀬玄朔（一五四九〜一六三一）の舊藏した『三元參贊延壽書』（福井崇蘭館の舊藏書として杏雨書屋に寄託）の正統三年刊本の朝鮮版も残っている。『攝生之常鑑』の引用で道三没後に成立した書はなかったので、やはり現行の『攝生之常鑑』は、初代道三が原撰で、なんらかの正純の手が加わったものとするのが妥當ではないかと考えられる。



## 日文研宗田文庫所藏『五輪碎并病形』の検討

池内早紀子（大阪府立大學大學院）

國際日本文化研究センター（日文研）宗田文庫收藏の『五輪碎并病形』は肉筆墨書插圖（彩色）幅二八cmの一軸からなる卷子本である。制作者、制作地は不明で江戸中期頃のものと考えられる。冒頭に（A）五輪塔の圖とそれに紐付けされた五臟圖と顔面圖、次に（B）道教經典に見える内景圖に類似した體內投射圖、最後に（C）本邦の鍼灸流儀書に見えるのと同様の「蟲」の圖（實見することはできない想像上の蟲。中近世の日本では主要な病因の一つと考えられた）が描かれる。これら三種の圖を集積しているのが特徴である。本書は佛教、特に密教思想の影響を受けた醫書とされることが多い。しかし（B）には「蟲」が三尸、三魂七魄とともに圖示されており、本書への道教思想の影響を無視することは出来ない。そこで本書を手掛かりとして中近世の日本における病因論成立の一端を解明したい。

本書題名にあり（A）で示される「五輪碎」圖は、室町から江戸期の鍼灸書や馬醫書にみられる解剖生理學的圖で、五輪塔の各部分を「五大（地水火風空）」に配當し、これと人身の部位、五臟との關係を示した點に特徴があ

る。遠藤次郎らは、類似の書として①本書、②杏雨書屋藏『醫家秘法・解剖圖』・『圓覺經』、③『永正解剖圖』、④『五臟之守護并蟲之圖』、⑤『針聞書』、⑥『安西流馬醫傳書』・『安西流馬醫繪卷』等があることを報告している。また眞柳誠は藤井文庫藏『桃山時代解剖之圖』も類似の書であることを報告している。これらの資料に見える「五輪」と五臟の関係については本邦の新義眞言宗の祖、覺鑊『五輪九字明祕密釋』の五臟説の影響が考えられる。この書の五臟説と中國醫書との関係についてはすでに頼富本宏や田中文雄らが詳細に論じている。

一方、江戸期以降、日本では「疝の蟲」と言われるように、小兒を對象とした「蟲」の病が考えられその治療が行われてきた歴史があり、現在でも關西には「蟲ばり」の看板を掲げる鍼灸院が存在する。さらに本邦の鍼灸流儀書には「蟲」を圖示しその治療法を解説する書が複数存在する。本發表で取り上げる『五輪碎并病形』もその一つである。例えば上記に挙げた『針聞書』はその中でも最も多い六三種の「蟲」圖および治療法（主に藥物治療）を記載している。中國の醫書や道藏にも僅かながら「蟲」圖があるが、本邦の鍼灸流儀書のそれとは全く異なる。圖は異なるがここには三戸を始めとする道教思想の影響があったと考えられる。『五輪碎并病形』は「五輪碎」・「蟲圖」・「鍼灸治療」を併せて載せるところに大きな特徴がある。

本發表では、まず本書を精査し、さらに類する書との比較を通して、中近世の日本における「蟲」を病因とする病理觀の成立過程およびそれに對する道教思想の影響を探りたい。

「馴虎」について——道教および佛教に關連して——

小山 瞳（關西大學大學院）

「馴虎」とは、人になつく虎、および人間が虎をしたがわせることをいう。「馴虎」は道教經典や佛教經典中の説話文獻やその他關連する畫像資料にしばしばみえる。

「馴虎」については、明・陳繼儒『虎齋』の序に「虎は談ずるに足らず、而して仙釋は虎を馴らすことを以てすべし、循良は虎を驅ることを以てすべし、孝義は虎に格ることを以てすべし、猛悍は虎を殺すことを以てすべし……」とある。ここでいう「仙釋」とは神仙および僧侶のことであり、虎を馴らすことについては神仙・僧侶の傳記に多くみえる。

虎を馴らすことについて、文獻に載る最も古い例は『莊子』人間世篇にみえる、衛國の賢人・蘧伯玉の言である。蘧伯玉は、虎に生きた動物を與えないことによつて、虎に怒心を生じさせないようにするなどし、虎の本性に従ふことによつて虎を馴れさせることができるという。また、『列子』黃帝篇にも、周の宣王の牧正・梁鴛の話として虎を飼育することがみえる。これは『莊子』人間世篇を説話化したものであり、「順なく逆なき中」を説く思想としての展開がみられる（『中國古典文學大系4 列子』二二七頁・福永光司解説）。その後、「馴虎」の表象は『神仙傳』所收董奉および太眞夫人の傳記や『壩城集仙錄』所收の女仙の傳記などにも引き繼がれ、後世では孫

思邈の伏虎説話にも見られる。

畫像資料では、漢代の畫像石に西王母と虎を配置するもの（沂南漢墓墓門西立柱畫像）や虎車に乗って昇仙するもの（楊一村後漢墓虎車昇仙圖）がみえる。西王母と虎がともに配置されることや虎車に乗ることについて、神仙が虎を馴らしているとまではいえないが、このような神仙と虎とのつながりもまた「馴虎」の成立に關與していると思われる。

一方、佛教資料にも「馴虎」の現象がみられるが、道教資料とはその描かれ方が異なる。まず、僧侶が虎を従わせる場合、二パターンに分けることができる。一つめは、梁・慧皎『高僧傳』卷九及び卷一二所載の釋弘明や耆城の傳記などにみえるものである。ここでは、虎が高僧を前にしておとなしくなるパターンである。二つめは、『法苑珠林』卷一八の沙門靜生の傳記にみえるものである。高僧や佛教信者が唱える經典に感じて、虎がその人物を襲わないパターンである。これらはいずれも佛教の功德を強調するために創作された虚構と考えられる。

なお、「馴虎」については、「馴虎」の表象について——『太平廣記』所收虎説話を中心に——をタイトルとして、現在、中國古典小説研究會に投稿中である。こちらは『太平廣記』を主な資料としており、説話的觀點から考察を行ったものである。

本發表では、道教および佛教に關連する説話資料および畫像資料をもとに「馴虎」について整理し、その歴史的背景や思想的背景について考察をおこなう。

## 明代中期の關羽信仰―官僚呂柟の記録を中心に

朝山 明彦（北海道大學大學院）

三國時代の武將關羽を神として祀り、何らかの靈驗を期待することを關羽信仰という。

先行研究によると、明朝に於ける關羽は、明初に規定された「漢壽亭侯」という侯號から、明末には「協天大帝」や「三界伏魔大帝」という帝號を有し、歷代王朝の祀典には見られない變革を遂げた。また、地方や民間に於いても『三國演義』や三國戲の流行、山西商人の活躍と相俟って、中國各地に關羽信仰が見られ、官僚・文人による地方志や文集雜記に關羽顯彰の碑記などの記録が盛んに残されるようになった。

以上から、發表者は明代の關羽信仰について次の點に留意し、問題提起する。一つには、明初の洪武期から明末の萬曆期に至るまで二百年以上もの年月が経つが、その間の明朝に於ける關羽信仰の位置付けはどのようであったのか。さらに言えば、關羽は「漢壽亭侯」から王號を経ずに、一足飛びに帝號まで駆け上がったのか。いわば、封號問題をはじめとして明朝が關羽信仰をどのように位置付けたのかという視點である。そして、もう一つには、地方志や個人の文集雜記に於ける關羽信仰の事例を集める中で、當時の社會や信仰を具體的に描き出した記録を探して讀み解くことである。

明朝でも地方や民間でも、關羽信仰の實態解明の事例はまだ多くはない。明代の關羽信仰を述べるには、明朝に於ける總體的枠組みの再構築と地方や民間の個別事象の具體的分析が必要であろう。

そこで、本發表では、明初と明末の間となる明代中期に焦點をあて、そこで活躍した官僚呂柟（りよなん）の記録を分析する。呂柟は學問にすぐれ、成化・弘治・正徳・嘉靖の明代中期の時代を生き、陝西の地方都市から北京の中央政界へと頭角をあらわした當時の大物官僚であった。その後、山西解州への左遷から大都市南京への復歸という官僚として浮き沈みがある中で、呂柟は關羽信仰とどのように関わっていったのか。呂柟の記録とそれに派生する記録を辿る中で、明代中期の關羽信仰の一側面について言及する。

具體的検討としては、二〇二〇年に刊行されたアメリカのハーバード大學燕京圖書館藏・呂柟撰『義勇武安王關公集』を利用し、呂柟が關羽信仰に携わるようになった轉換點の嘉靖四年（一五二五）に至る状況を明らかにする。官僚は國家と地方・民間をつなぐ存在であるため、呂柟のような官僚が關羽の文獻を編纂し、關羽顯彰の記録を残すことは、當時の關羽信仰を解明する大きな手がかりとなる。まず、呂柟登場以前の武宗正徳期の關羽信仰の状況、「義勇武安王集序」から見える呂柟の關羽文獻編纂への過程と「嘉靖」『高陵縣志』に見える呂柟の動機に迫る。さらに、嘉靖四年（一五二五）以後に書かれた解州の「重修二忠祠記」や南京燕子磯の「重修義勇武安王廟記」を読み解き、合わせて同時代の記録から當時の關羽信仰の具體例を述べていく。

## 江南佛教總攝楊璉眞伽の道教攻撃とその波紋

孔 詩（東京大學大學院）

楊璉眞伽は、元の世祖クビライ朝に活躍していた河西出身のタングート人とされるチベット佛教僧である。南宋接收後、江南地域における佛教の最高責任者として登用され、世祖の支持を得ながら宰相桑哥の勢力を後ろ盾とし、辣腕を振るいながらも横暴を盡くし、最終的には至元二八年（一二九一）に桑哥の没落に伴って免職されたことでは知られている。

楊璉眞伽の事跡の中で最も悪評高く、かつ従來の研究の重點として一般に廣く知られているものは、南宋の御陵を盗掘したことであるが、その一方で、江南佛教總攝として佛教の護教と興隆を目的とした活動も甚だしく暴虐的であると指摘されており、佛教と對立していた道教へ甚大な損害を與えたと言える。本發表は従來系統的に論じられていなかった、楊璉眞伽が江南の道教にもたらした多大な被害に着目し、具體例に即しつつ考察する。

本發表では三つの角度から、この江南佛教總攝楊璉眞伽の道教攻撃を檢討する。第一に、楊璉眞伽の彈壓によつて道觀から佛寺への轉換が起つた事例として、南宋皇室の御前道觀、道士から獻上された道觀、及び民間の道觀という三種の分類を行い、それぞれのケースに關して、各種資料を引證しながらその實情を分析する。第二に、道教關係者から一般の知識人に至る多様な人人が續續と楊璉眞伽の道教に對する壓迫行爲を糾彈しただけでなく、同じ佛教勢力である江南禪宗の僧侶の一部からも、沈黙を破つて楊璉眞伽などのチベット佛僧の横暴さに對して強烈な反發が生じたことを論じる。第三に、胡僧である楊璉眞伽の道教攻撃を道佛二教交渉史、あるいは三教交渉史上の一つの典型的な事例と見なし、それから中央政治と地方の二教の關係、華夷觀、及び當時江南知識人が持つていた道教に對する認識など、いくつかの側面からその特徴や歴史的な意味を考える。



## 近代マレーシアにおける青蓮教系教派の傳教について

小武海櫻子（成蹊大學）

一九世紀半ばから二〇世紀初頭にかけて、中國の青蓮教系民間教派が長江流域から東南アジア諸地域へ傳播したことは、すでに従來の數多くの先行研究により明らかとなっている。このうち、とりわけ英領マラヤ（現在のマレーシア・シンガポール）においては、早期には普度門（先天道）、二〇世紀には歸根門、聖教會（同善社）などが傳播しているものの、現地での華人布教者の姿がどのようなものであつたかについてはまだ解明が不十分である。本報告では、現地で収集した經卷や布教者の著書をもとに、近現代マレーシアにおける聖教會・歸根門兩教派の諸活動の足跡を觀測していく。

聖教會すなわち同善社は、清代道光年間の青蓮教分裂後に独自の道統を立て、一九二〇年代までに全國に急速に廣まった民間教派の一つである。ほかの教派と異なり、教祖が強い権限をもつことから扶乩を許さず、本部である重慶の洪信祥と、北京總社、および漢口の合一會と稱する全國各省各府縣の支部を繋ぐ窗口機關によって信徒の活

動を嚴格に管理した。しかしながら、新中國成立前後に教祖が死亡すると組織は瓦解し、中國から海外へ渡った残りの支部は教義を保ちつつも、臺灣・香港・東南アジア各地域にてそれぞれに變容していった。香港においては他の扶鸞團體とともに扶乩が行われ、一九六〇年代のシンガポール・マレーシアにおいても後繼の教團である聖教會にて扶乩が引き繼がれた。また、マレーシア西岸部に點在する聖教會では各支部同士の交流範圍がそれぞれ異なり、施善對象も華人にとどまらず現地のマレー人も含んだ。また東南アジアにて廣く信仰されている九皇大帝を祭祀對象に加えるなど現地の華人社會の文化的文脈に結びついた信仰生活が展開された。

一方、歸根門についてみると、一九二〇年代後半から英領マラヤ時代のシンガポールにて聖教會の布教を務めた蔡飛が歸根門への轉向後、一九六〇年代にマレーシアにて積極的な布教活動を行った。歸根門の南洋傳道は一八代祖師を耿昊靈が繼承した一九二九年以降だと考えられる。蔡飛は、歸根門の據點である雲南からの布教者と接觸しつつ、香港・シンガポール・マレーシア西岸部・ペナンに少なくない支部を設立したとみられる。その後、同善社の三教合一論を棄てて五教合一論へ傾斜していくが、イスラーム・キリスト教をも包攝した人類救濟神話が現地の華人社會にも求められていたといえよう。

## 宋代の鍊度と知識人

松本 浩一（筑波大學名譽教授）

亡魂の救済のために行う黄籙齋は大規模な儀禮であり、三日間毎日三度行われる行道儀や設醮、拜表などからなるが、宋代に新しく形成された召魂から傳符授戒を経て亡魂を天界へ送り込むための一連の儀禮、中でも鍊度の儀禮は特に道教的特色を持つものとして注目に値する儀禮といえる。

従来鍊度は内丹の行法を反映した儀禮により、死者の身體・靈魂を仙人にふさわしいものに變化させる儀禮とされてきたが、前論の「鍊度的「鍊」」では、鍊度の儀禮が必ずしも内丹の行法が反映されているわけではないこと、また人間としての復活が必ずしも仙人として復活することにはつながらないことなどを指摘した。

この発表では、初めに金允中『上清靈寶大法』卷三七「水火鍊度品」、『靈寶領教濟度金書』卷一〇六「明眞齋・鍊度儀」に記述された鍊度において、唱えられる呪文と存思の内容に注目して、水火鍊度および九天鍊度において、実際には死者に對してどのようなことが行われようとしていたのかを明らかにしたい。水火鍊度についていえば、水鍊は「（罪過による）穢れを洗い流すこと」、火鍊は「形・神を鍛えなおし、穢炁・陰炁を陽炁に變える」のが主

な目的であるといえる。さらに鍊度では「化生十二炁符」、「五芽符」、「大洞十八玉符」なども發せられるが、それらは炁を降して身體を新たに形成し、そこに神を宿らせることを示している。一連の儀禮の目的は、死者を仙人にすることではなく、人間として復活させ、資格を得させて天界に送り込むことという方が正確なのではなからうか。鍊度はそのプロセスの重要な一環であった。鍊度に見られる存思の内容も、内丹に類似するところは見られるが、むしろ靈寶系の儀禮に見られる存思の系譜を引くものではないだろうか。

鍊度の前後に、亡魂に對して説教を行う過程が存在する。ここには生死を超えて存在する、いわば輪廻の主體が何であると考えられているかがはっきり示されている。金允中はこれを「二性」とし、「濟度金書」では「神」すなわち「性」と捉えている。後者では「天命の性」と「炁質の性」を區別したり、『清淨經』を引用したりあるいは佛教の教義を引用したりと、この説教を書いたのが三教に通じた知識人であることを思わせる。

また復活の過程で重要なのは神と氣(炁)とされているが、九天鍊度などという「炁によって身體を形成し、そこに神を宿らせる」という場合の神と炁と、「道は神の主であり、神は氣の主であり、氣は形の主である」、あるいは「夫れ我身の陰陽造化と謂う者は、神と氣である。神は氣の母であり、神が動けば則ち氣が隨う」という場合の神と氣との関係は、どのような関係にあるのか明確ではない。符を發行する際の呪文・祝文あるいは儀禮の解説、説教の中などで示された性、神、氣(炁)の捉え方については整理が必要である。

## 第七十三回日本道教學會記念講演

### 古代日本・朝鮮の出土資料―人面土器―から描く日本列島における道教

平川 南（國立歷史民俗博物館名譽教授・山梨縣立博物館名譽館長）

中國甘肅省敦煌石窟莫高窟第一七窟から發見された古文書群は八〜一〇世紀が中心であるが、その文書群の中に、『敦煌掇瑣（てつさ）』の録文に道教の符籙がみえる。ここに描かれている人面像こそ、人面土器の祖型といえるであらう。

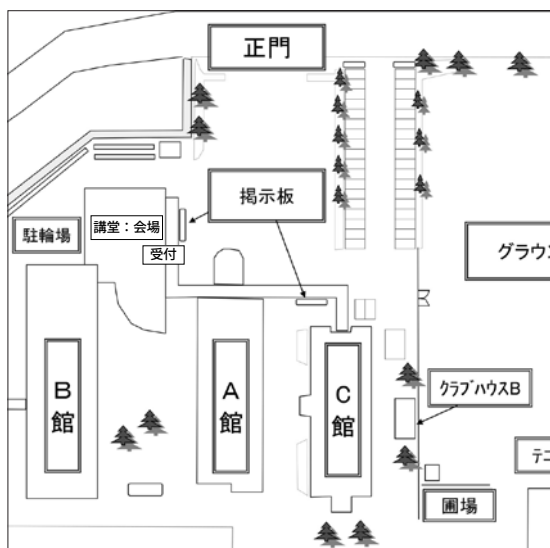
韓國において、二〇二〇年、古代新羅の都・慶州の西方、慶山・所月里遺跡の發掘調査によって、六世紀における臺地とそれを刻む谷川を利用した谷水田開發に伴う人面土器を用いた祭祀關係遺構・遺物が臺地上で確認された。谷水を利用した水田開發の具體的樣子は、古代日本の『常陸國風土記』（和銅六（七一三）年）に記載されている。この常陸國の水田開發と村落形態は、隣接する下總國でも、印旛沼水系の新川本流に面して古墳時代の集落遺跡が分布するのに對して、奈良・平安時代にはさらに新川支流の樹枝狀の谷の縁邊部にまで遺跡の分布は増大している。地方豪族が日常生活の水と耕地を求めて印旛沼水系の奥にまで開發を進めている。さらに注目すべき點は、この臺地上の八〜一〇世紀代の集落遺跡では、現段階で日本列島における古代集落として最大數の長文の墨書土器と人面墨書土器が出土していることである。

この畫期的な開發と文字文化は、日本の古代國家による東國の廣大な未開拓地への新羅など渡來人の大規模な移住政策によるものであろう。

さらにいえば、墨書土器に記された祭祀主體が房總の在地豪族であることにも注目したい。在地豪族と渡來系移住民は、中央政府による東國さらには東北地方支配の國家的神祇である香取・鹿島兩神宮の膝下において、「國神」(在地神) 信奉と、異文化としての道教思想に基づく泰山府君と閻羅王への「延命」などの祈願を人面と文字で表記する土器祭祀によって實施したのである。

付け加えるならば、古代日本の都城・國府などで實施された病や災いなどのケガレを人形や墨書人面土器に移して流水に流す「一撫一吻」の祓(はら)いとは全く異なり、上記の古代朝鮮と房總臺地上の人面土器の祭祀行爲は、川に流すことは行わず、祓いの儀に使用した人面土器などの祭祀具を臺地上の穴なり窪みに封じ込めたと想定できるであろう。

平川 南・國立歴史民俗博物館名譽教授。山梨縣立博物館名譽館長。文學博士(東京大學)。専門は日本古代史。木簡、漆紙文書や墨書土器などの出土文字資料や自然環境から日本古代史の實像を描く研究を展開している。近年では韓國木簡・石碑などの調査や、對外關係や地域間交流などにも研究テーマを擴大している。主な著書は『漆紙文書の研究』(一九八九年、吉川弘文館)、岩波新書『よみがえる古代文書―漆に封じ込められた日本社會―』(一九九四年、岩波書店)、『墨書土器の研究』(二〇〇〇年、吉川弘文館)、『古代地方木簡の研究』(二〇〇三年、吉川弘文館)、『全集 日本の歴史2 日本原像』(二〇〇八年、小學館)、『東北「海道」の古代史』(二〇一二年、岩波書店)。最近の著書として、『新しい古代史へ』シリーズ全三卷(二〇一九―二〇二〇年、吉川弘文館)。



アクセス JR甲府駅から

### 徒歩

JR中央本線 甲府駅 南口 徒歩20分

バス (JR中央本線 甲府駅 南口 バスターミナル4番のりば)

中央病院行き

中央病院経由双葉ニュータウン行き

中央病院経由敷島営業所行き

中央病院・羽黒経由山宮循環行き

長塚行き

長塚経由双葉ニュータウン行き

長塚経由敷島営業所行き

飯田経由敷島営業所行き

飯田経由敷島団地行き

→ 【飯田3丁目】下車 徒歩7分

日本道教學會 第七十三回大會要項

發行日 令和四年十月十日

發行者 日本道教學會 第七十三回大會準備委員會 委員長 名和敏光

〒四〇〇-〇〇三五 山梨縣甲府市飯田五-1-1

山梨縣立大學國際政策學部 名和研究室內





---

〒400-0035 山梨縣甲府市飯田5-11-1  
山梨縣立大學國際政策學部 名和研究室內

**日本道教學會第73回大會準備委員會**

E-mail [doukyougakkai73@gmail.com](mailto:doukyougakkai73@gmail.com)

---